連載コラム

第 47 回

花壇の花（5）― 晩秋から初冬へ ―

もとよし　ふさお
本吉 總男　2018 年 12 月

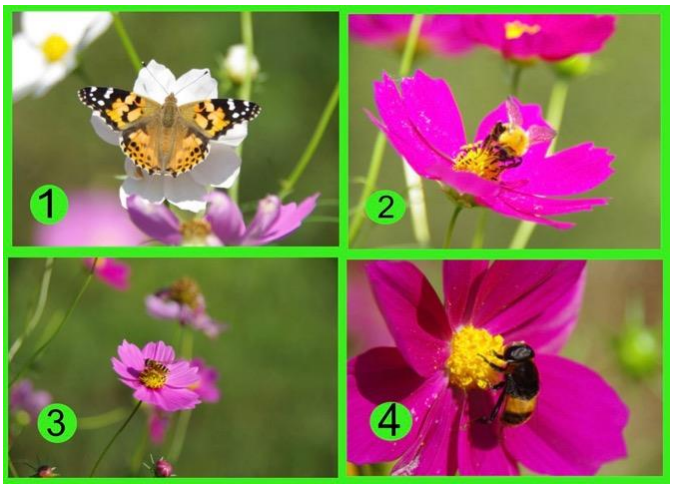
もう 12 月も中旬。モミジの季節も過ぎてしまいました。花壇に目を転じてみましょう。花壇は早くも春の準備で、越年草のビオラ、アリッサム、ノースポールなどの植え込みが始まっていますが、宿根草はそのまま残っています。とりわけ、ノギクやキクは寒さに負けず、まだ頑張って咲いています。

今回は、少し時期をさかのぼって、晩秋から初冬までの花壇の草花について述べることにしました。

1　コスモス

コスモスはメキシコ原産の植物で、明治9年（1876 年)、東京美術学校に赴任したラグーザが明治12年（1879 年)に種子をイタリアから持参したものが広がったとされています（週間朝日百科「世界の植物」6）。コスモスには「秋桜」という字を当てています。日本人が愛好する植物のひとつといえるでしょう。みずき野では第2調整池の花壇にみられます。コスモスにはいろいろな昆虫が好んで来訪します。

コスモス　11 月上旬　第2調整池花壇



コスモスの花と昆虫
① ヒメアカタテハ
② コマルハナバチ
③ ヒラタアブの一種
④ オオハナアブ

2　シュウメイギク

シュウメイギク（別名キブネギク）はキク科ではなくキンポウゲ科アネモネ属の植物です。原産は中国で、日本には江戸時代か、それ以前に渡来したと考えられています。水

野元勝の著書『花壇綱目』（草稿は 1664 年にできたという）に「秋明菊（しゅうめいぎく）花紫色なり」とあることから、それ以前からあったと考えられます（『北村四郎選集 I』 保育社）。

シュウメイギクはいろいろな栽培品種がつくられており、ピンクや紫のものもありますが、みずき野では、シュウメイギクは第 I 調整池北側花壇で白花の品種を見ただけです。

シュウメイギク　10月下旬　第 I 調整池花壇

3　ヒメツルソバ

ヒメツルソバはヒマラヤ原産のタデ科の多年草です。明治年間に日本に導入されたと聞きますが、明治年間のいつ頃入ったのかははっきりしません。ロックガーデンに利用されたようですが、繁殖力の旺盛な植物で、現在は帰化植物として野生しています。淡紅色の小さな花が、直径 I センチほどの球状に集まって咲き、そのような花の球をたくさんつけるので、可愛らしい植物です。また、花を近くで見ると、ひとつひとつの花が大変美しいことに気づきます。

ヒメツルソバの花は春から初冬までいつでも見られますが、花の数が多く、彩りもよいのは、晩秋から初冬にかけてです。

ヒメツルソバ　11 月下旬　郷州公民館花壇
それぞれの花は小さいが、とても美しい

4　オシロイバナ

オシロイバナはメキシコ原産のオシロイバナ科の植物で、高さ1メートルほどの大きな多年草です。元禄時代（1688 年～1704 年）に記録があるので、それ以前に日本に入ったと思われます。花期は長く、花は6月～11 月頃まで見られますが、晩秋の花がいちばんきれいだと思います。

花は夕方咲いて、翌朝しぼんでしまいます。英語名を four-o’clock といいますが「夕方4時に咲く」という意味でしょう。下の花の写真は晩秋の午前 10 時に撮影したものですが、日が短くなって気温も低い季節になったので、この時刻でも花が開いていたのでしょう。夏ではこの時刻には花はほとんどしぼんでいます。

オシロイバナの名は種子を潰（つぶ）すとおしろいのような白い粉が出てくることから名付けられました。ただし、オシロイバナは有毒植物ですので、実（み）は食べられません。

オシロイバナ　11 月下旬　第1調整池花壇

オシロイバナの実
11 月中旬　第1調整池花壇

5　ツワブキ

ツワブキは本州から沖縄までの日本列島と東南アジアに原産するキク科の多年草で、海岸近くに野生する植物です。栽培もされており、みずき野では、7丁目遊歩道沿いの文化財公園の石垣下に植えられています。花は 10～12 月頃咲きます。暗緑色で艶（つや）のある葉と黄色の鮮やかな花がくっきりと調和して、見応えのある植物です。翌年2月頃には、白い綿毛をつけた実が風によって運ばれていきます。

ツワブキ　11 月中旬　文化財公園石垣下

ツワブキの実
2月上旬　文化財公園石垣下

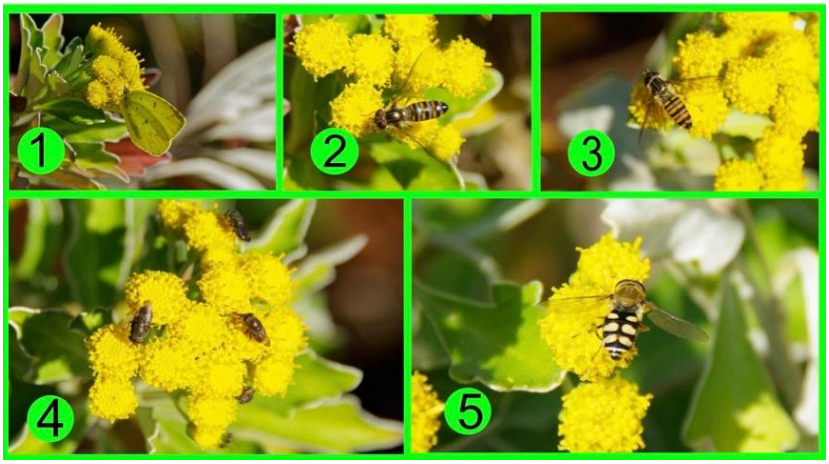
6　イソギク

イソギクは関東南部から東海、伊豆半島の海岸地方に自生する日本固有のキク科の多年草です。花の少ない冬に咲く植物なので、園芸植物としても貴重なものです。頭花（とうか）は舌状花（ぜつじょうか）をもたず、すべてが黄色い筒状花（とうじょうか）（管状花（かんじょうか））で構成されています。みずき野では中央広場の入り口付近に植えられています。（キク科の花の構造については、第 3 回「タンポポと類似の野草たち」に詳しく紹介しています。）

イソギク　11月中旬　中央公園花壇

イソギクの栽培が始まったのは江戸時代と考えられます。江戸時代中期、1717 年に出版された伊藤伊兵衛著『広益地錦抄（こうえきぢきんしょう）』には「岩菊」、一名「泡菊」として図と記事があり、これが現在でいうイソギクなので、イソギクの栽培はそれ以前から行われていたと考えられます（週刊朝日百科「世界の植物」3）。

イソギクの花を観察していると、虫たちが盛んに訪問してくることがわかります。キタキチョウ、ヒラタアブ、ツマグロキンバエは成虫で越冬する昆虫なので、花の少ない冬には、これらの昆虫にとってイソギクの花は蜜を得るための貴重な存在なのでしょう。



イソギクと昆虫
① キタキチョウ
② ミナミヒメヒラタアブ
③ ホソヒラタアブ
④ ツマグロキンバエ
⑤ フタホシヒラタアブ

7　ノコンギクとコンギク

ノコンギクは本州、四国、九州に分布する日本の固有種で、キク科の多年草です。山野に普通に見られる野草ですが、栽培品種もつくられていて、花壇に植えられています。写真のものもノコンギクの栽培品種のひとつと思われます。

コンギクはノコンギクに極めて近縁の園芸植物です。ノコンギクの舌状化(ぜつじょうか)は薄紫ですが、コンギクはそれより濃い紫色です。コンギクはわが家の庭にもあります。極めて旺盛に地下茎によって困るほど増えます。でも、花の少ない初冬まで咲いているので、その季節の切り花に役立ちます。

ノコンギク　11 月中旬　第1調整池付近の花壇

コンギク　11 月中旬　第1調整池花壇

8　リュウノウギク

リュウノウギクは本州、四国、九州に分布する日本の固有種で、キク科の多年草です。日当たりの良い丘に生え、また園芸植物として利用されています。葉は切れ込みがあり、3つに分かれていること、裏面が毛で覆っていて白く見えることで、キクと区別できます。

リュウノウギク　11 月中旬　中央公園花壇

茎や葉は揮発性の脂質を含み、その香りが竜脳(りゅうのう)に似ていることからリュウノウギクと名付けられました。竜脳(りゅうのう)は東南アジアの熱帯雨林に生える巨木、リュウノウジュから採れる精油から作られた結晶で、香料として使われ、仁丹(じんたん)や線香に含まれているそうです。

9　キク

キクは春のサクラに並んで、日本の秋を象徴する花なので、日本固有の植物と思われがちですが、中国から渡来したものです。

キクが初めて日本にもたらされたのは奈良時代と推定されていますが、その後、平安、鎌倉、室町時代にも次第に改良されたキクが中国から輸入されました。江戸時代に入ると、園芸ブームが起こり、キクの改良も盛んに行われ、世界に誇る大輪の品種もつくられました。一方では、大輪のキクの一本仕立て、三本仕立て、中輪や小輪のキクの盆栽、懸崖(けんがい)（茎や枝が根よりも下に垂れ下がるように仕立てた盆栽（広辞苑））など、キクの美を極限にまで表現するため、栽培技術の発展に目覚ましいものがありました。今も、日本のあちらこちらで菊花展や菊人形展が開催され、多くの人を魅了しています。

そんな芸術作品のような菊とは対照的に、花壇や畑の片隅に植えられたキクには、自由にのびのびと育って、たくさんの花を咲かせている姿に魅力があります。

みずき野町内のキク　上3枚　11 月中旬　第1調整池
下3枚　11 月下旬　第2調整池花壇

キクはいい香りがします。下は著名な芭蕉の句です。

> 菊の香や　奈良には古き　仏達
>
> 松尾芭蕉（笈日記）

元禄7年（1694　年）9月9日の作とされています。旧暦9月9日は重陽の日、菊の節句とも呼ばれています。この日を奈良で過ごすため、芭蕉は9月8日に伊賀を立ちました。旧暦9月9日は新暦では 10 月中旬に当たります。この頃、キクの花は新鮮で良い香りを放ちます。

重陽には宮中で観菊の宴が催されていました。「菊の被綿」という行事も行われました。重陽の前夜に菊の花に綿を覆って、その露や香を移し取り、翌朝その綿で身体を拭うと長寿を保つと思われていました（広辞苑）。

源氏物語「幻」の帖には、次のような一文があります。

> 九月になりて、九日、綿おほひたる菊を、御覧じて、
>
> もろ共に　おきゐし菊の　朝露も　ひとり袂に　かかる秋かな
>
> （あなたと一緒に被綿をした菊の花も、この秋はただ一人、その朝露で袂を濡らしている自分です）

光源氏が亡き妻、紫の上を偲ぶ場面のひとつです。

「幻」は紫の上が亡くなる「御法（みのり）」に続く帖で、もっぱら紫の上を想い、1 年の間、もはや女性たちとの交渉もなく、もっぱら悔恨とともに偲び泣く源氏の姿が書かれています。源氏は多くの女性と関係をもち、紫の上に苦労をかけ続けましたが、やはり紫の上は源氏にとって最愛の人だったことがよくわかります。なお、「幻」は晩年（52 歳）の光源氏が登場する最後の帖です。以後の物語は次の若い世代に移っていきます。